王朝文芸の宗教的史観 (三)

源氏物語と平家物語の比較 (二)

村田　昇

第一論　序　説

源氏物語前篇の主人公光源氏は、母こそ位低い更衣であれ、天皇を父とした最高の貴族である上に、美貌の秀才であったことは、美を重んずる時代社会に相応した造型人物であった。然しその美貌が彼の生涯を過まらせ不幸にした。彼は世にも珍らしく恐ろしい性的過失を犯して苦しむ。そして反省し次第に菩提の道を昇り生長して往き、人間の栄華も享楽も夢幻と観じ、遂に幻の巻で出家入道する。この強靱な求菩提の一生は人間の理想的典型である**往生成仏伝**である。人生夢幻観といひ、出家入道といひ、死を充実させる為の生否定の美学である。

次に源氏物語の女性と平家物語の女性の運命を比較してみやう。源氏物語は女性哀史である。これは勿論男性の横暴を意味しているが、その男性は清盛の如き特立した一人ではなく、歴史社会環境全体の生態であった。美貌と才能を以て上級貴族に愛せられることを、こよなき生き甲斐とした。恋愛は自由であったが、それは男女対等の人格愛ではなく、男性の性の享楽を擅にするに都合よき習俗であった。その結果は多く女性の不利になっている。宮廷は遊廓であって、僧澄憲がいう如く、「女后百人みなひさめ」（塵添壒嚢鈔巻三・中山太郎・売笑三千年史二四五頁）であった。女性は経済的自立の可能な社会ではなかったので、男性又は大寺大社の経済力にすがって生活せざるを得なかった。その為経済的自活をする必要が無く、意志の弱い、貞操観念も無い、運命に操られる人形（鬼儡子）の様な女性が育ち、男性も亦かかる女性を、「ただひとえに物まめやかに、静な心のおもむき」（源氏物語・帚木）ありとして愛翫した。経済に疎いことは、貴族生活の基底にあった農民生活に無関心であり、それを卿って誇りとした。鈴木大拙がいう、大地性・日本的霊性の喪失である。（鈴木大拙全集・日本的霊性）又、男性の性的翫弄物となる原因であった。「もののあはれをしる」という思想は、厭う男でもすげなく扱うのは女の恥、好まぬ女でも程よく遇するのは男の礼であるとするものであるから、貞操と物のあはれとは全く両立していなかった。封建的男女関係を内容としていた。以上が王朝宮廷女性の容態の概相である。

然るにほぼ同じ時代を書いた**今昔物語**をみると、源氏物語の女性とは反対に、自主的・意志的な女性が活動している。

今昔物語には、中央にあって不耕貪食して栄華逸遊する藤原一族に対する地方人の反抗が擡頭し、荘園経済破壊の端緒が見られる。中央の文弱に対して、地方は武力を以て抗争している。武力が重んぜられ、凶器が閃き、勇壮な歴史的事件が継起する。これを反乱と罵り、末法到来と悲しむのは、旧秩序でなければ地位が保てず食ってゆけぬ長袖者流のいうことで、弁証法の必然による自然である、天罰である。この時代に相応した女性。巻二十三の第十七、力の強い美濃女の乱暴を、力の強い尾張女が懲らしめて、市民に平安な喜びを与えた話。同第十八は、呉竹を取り砕くこと練糸を取る如く、五百人でも動かぬ船を、一人で引き動かす強力の女が、その力によって、国司や船主の悪棘を懲した所謂威武に屈しない勇敢な話。同第二十四、大きな箭篠の筋の許を、朽木などを砕く様に、手を以て押砕き、細い眩を枯木など折る様に打砕く女が、その力の故に男の残虐から遁れた話。（看聞御記永享十年十一月六日に「強女女絵」とあるのは、かうした女を書いたのであろうか）。巻二十九の第二十九は、山中で乞丐二人に捕えられ辱められんとした子を負うた若い女が、機智によって毒手より逃れた話で、「下衆の中にもかく恥を知る者は有るなり」と評している。同第二十八は、強盗の部下となった女が、男に強盗の悪事の計劃を知らせ、身死して男を救う仁侠譚。その処に寺を建てて迫善したとあるから、寺の縁起である。巻二十六の第二十三は、主人を殺さうとする敵を、居合せた作業中の下女が、協力して打殺す話。等々である。「梁塵秘抄」巻二には、「このごろみやこにはやるもの、わうたいかみかみゑせかつら、しほゆきあふみの女冠者、なぎなたもたぬあまぞなき」とある。かうした女性が出現する大地は、国家社会の秩序を保つ為には、文教のみでは駄目で、武力を必要するという社会である。馬蹄の音、矢叫の中に、日本の歴史が進転して行くことを、琵琶法師の承久記、保元物語・平治物語・平家物語の語りに聞くことができる。この中に生きる貴族女性は、深宮に十二単衣を着て遊んではいられない。

平治物語に語られた義朝の妻常盤御前の一生は悲壮である。夫義朝が家臣長田忠致に暗殺されて後、平清盛の兇殺を遁れ、源氏再興の悲願を胸に秘め、いとけなき三子の命を衣下に守って、山野を逃げ回り、遂に三子の命を助けたいばかりに、敵清盛の妾となっている。頼朝・範頼・義経三人の平家復讐の壮烈な意志は、母の霊力をついだのである。その霊力は、常盤が清水観音に参って、

わらはゝ観音にたのみをかけまいらせ、七歳のとしより月まうでおこたらず。十三ののとしより月ごとに一部の法華経をこたつず、十九の歳より月ごとに三十三礼の聖容をすりたてまつる。その観音の慈悲刹生ふかくおはしますことをうけたまはるに、三十三身の春の花、にほふたもとは数をしらず、十九数の秋の月、もりこぬ宿はよもあらじ、観音の慈悲刹生なれば、後世までと申とも、何かかなへさせたまはざるべき。いかにいはんや、今生に三人の子供の命を助てわらはにみせさせ給へ（平治物語）

と祈ってさづかったものである。かうした霊力が、独り中世に限らず日本の歴史を変え、文芸創造の動力因となっているのである。同じく平治物語において、切らるべき頼朝の命を清盛に願って助けたのは、忠盛の後室清盛の継母池の禅尼の慈悲心であった。そこで平家を亡したのは禅尼の慈悲心であったという論理が成立する。かう

いう行動的女性は源氏物語にはみつからない。

平家物語では王朝憧憬の色濃く、源氏物語風の女性が多く描かれている。これからその**女性**を抄出評論してみよう。

第二論　小督の巻

平家物語巻六「小督」も清盛の悪逆無道を語っている。清盛の毒牙にかけられたのは、高倉天皇とその寵姫小督の局である。高倉天皇の父は後白河院で、母は建春門院平時忠の妹である。この天皇が深く王朝的優雅と理世撫民のもののあはれを体していたことが「紅葉」と「葵の前」に語られている。清盛は二人の愛の絆を切断して小督を悶死させた。源氏物語では、桐壺の帝から愛された身分の低い桐壺更衣を嫉み殺したのは、弘徽殿女御であった。又、光源氏の正妻葵の上を殺し、後妻紫の上を苦しめ、後妻女三の宮を出家(尼)にさせたのは、光源氏から捨てられた愛人六條御息所の生霊・死霊であった。男がこの様な悪逆をしたことは描かれていない。源氏物語に描かれたのは女悪である。清盛の権勢悪は、男女の恋愛を武力恐喝して裂いた。さて小督の物語が、源氏物語桐壺巻の桐壺帝と更衣との恋愛の叙事の影響をうけていることは、既く島津久基が「源氏物語講話」に発表している。「小督」の事で源氏物語で帝と更衣との仲介にあった靱負の命婦の役をしたのが、弾正の大弼仲国である。双方を抄出して比べてみやう。

野分だちて、俄に膚寒き夕暮の程、常よりも思し出づる事多くて、靱負の命婦といふを遣はす。夕月夜のをかしき程に、出し立てさせ給うて、やがてながめおはします。……命婦、彼処に罷出着きて、門引入るゝより気はひ**哀れ**なり。……草も高くなりて、野分にいとゞ荒れたる心地して、月影ばかりぞ、八重葎にも障らずさし入りたる。（桐壺）主上御なげきなのめならず。晝は夜の御殿にのみ入らせ給ひて、御涙に沈ませおはします。夜は南殿に出御なって、月の光を御覧じてぞ慰ませましける。……亀山のあたり近く、松の一群ある方に、かすかに琴ぞ聞えける。峯の嵐か松風か、尋ぬる人の琴の音か、おぼつかなは思へども、駒を早めて行くほどに、片折戸したる内に、琴をぞ弾きすまされたる。控へてこれを聞きければ、少しもまがふべうもなく、小督の殿の爪音なり。楽は何ぞと聞きければ、夫を想うて恋ふとよむ、**想夫恋**といふ楽なりけり。（小督の事）

どちらも季節は**あはれな**秋である。

仲国と小督の心を結合したのは、琴と横笛の音であった。宇宙は律動している音響体である。それが人類社会の秩序の根元である。小督の心の底の帝を恋う純粋主観（愛情）は、心弦とも称すべき律動する小宇宙、音響体である。小督を探ねる仲国の心弦は、小督を恋慕する帝の心弦であって、それは横笛によって吹奏された。小督の琴の音、仲国の横笛、楽器は異り空間は隔っていても、相愛の心弦の音波は同じであるから、三人の心は一處に結合した。「峯の嵐か松風か、尋ぬる人の琴の音か、」は、**黒田節**にも転用されて大衆に噚炙されているが、人を恋うまこと、実存の感情は、天地自然も和するのである。日本人はかかる自然信仰感情をもっている。この汎神論的自然認識を仏教では音響認という。これを詳説しているの

が、弘法空海の「声写実相義」、道元の「正法眼蔵谿聲山色巻」である。源氏物語「橋姫巻」の「實にはた此姫君達の琴弾き合はせて遊び給へる河浪に競ひて聞え侍るは、いと面白く極楽思ひ遣られ侍るや」とあることも、右の仏教哲学から理解できる。

詩歌は天啓の声・生命の躍動・韻律によって書かれた文芸といはれる。詩の韻律とは心に起る浪の音波である。源氏物語が歌道の鑑とされているのは、小説であって内部韻律を有ち、歌物語としての性格を有っているからである。即ち音楽性を有つからである。それは王朝貴族文化が極めて音楽を重んじたことを意味している。平家物語は平曲として謡はれているから、その音楽性は源氏物語以上である。平家という武家貴族が、藤氏同様に音楽を重んじたことは、平家物語に現はれていて、これも王朝憧憬の一証である。但し平曲は、王朝の藤氏が好んだ貴族的な雅楽・舞楽ではなく、琵琶盲僧という賤民の弾く俗曲であった。それを聞く者も貴族ではなく、多くは無智文盲の庶民であった。この様に論述すると源氏物語の音楽と平家物語の音楽は、全く異質と考えられさうだが、実はさうではない。音楽は主観を純粋にし、優美と崇高を兼ね、人心を上品に調和し、志気を高める。平安朝音楽には仏教の声明が貫流していた。院政時代になっても平曲は勿論今様も和讃も説経も声明の曲調を伝えている。公卿貴族の没落と共に、雅楽・舞楽は衰微していったが、庶民が好み創作した俗曲は、次第に盛大になった。それは俗曲は声明を主調としているからである。声明の異国的哀調は、浄土教の布教に協力して全国に拡散していったのである。源氏物語の内部音律も平曲も貫ぬかれてあるものは、声明である。

桐壺帝は独り秋の月をながめながら命婦の帰りを待つ。高倉帝も亦秋月をながめつつ仲国の帰りを待ちわびている。

清盛は源氏物語の美に憧れたが、人生観に沈潜する余裕なく、その皮相をのみ模して神髄であるもののあはれに徹しえなかった。これが平家滅亡の深因である。小督の愛情を切断したことはもののあはれではない。愛情を生き甲斐とする女性が、愛情を破壊された時の行方は出家か死であった。源氏物語の桐壺更衣も浮舟もさうであった。小督も出家している。

ここに純真な愛の崇高が語られている。平曲には、小督の殿を捕へつゝ、尼になしてぞ追放する。歳二十三。出家はもとより望なりけれども、心ならず尼になされ、濃き黒染に窶れ果て、嵯峨の奥にぞ栖まれける。

とある。「山槐記」治承四年四月十二の條には、

今日初齋院禊二東河一、入二御紫野院一、御年四歳新院第一御女内親王也、母権中納言成範卿女號二小督一即新院女房也。生二此宮一之後不レ参。去年冬為レ尼生年廿三、有二子細一歟。不レ知二其由一。

とある。

（後白河）法皇打続き御歎のみぞ滋かりける。―天に栖まば比翼の鳥、地にあらば連理の枝とならんと、天の河の星を指して、さしも御契浅からざりし建春門院（女御）秋の霧に侵されて、朝の露と消えさせ給ひぬ。（小督）

とあるのは、長恨歌の「七月七日長生殿、夜半無レ人私語時、在レ天願作二比翼鳥一、有レ地願為二連理枝一」を引いている。「桐壺」には、朝夕の言種に、羽を比べ、枝を交さむと契らせ給ひしに、叶はざ

りける命の程ぞ、盡きせず恨めしき

白氏文集六八に想夫憐と題して、玉管朱絃急莫急催一客聽歌送一十分盃、長愛夫憐第二句、請君唱夕陽開とあって、浅香井氏山井の徒然草諸抄大成には、頭書云、白氏文集、韵府等には想夫憐とあるをあやまりて憐を恋となせるなるべし（国文注釈全書十二巻）とある。又叡山に住した天台僧真源の「順次往生講式」には、想佛恋という音曲がある。源氏物語では想夫恋について、

いで弾き給へ、才は人になむ恥ぢぬ。想夫憐ばかりこそ、心の中に思ひて、まぎらはす人もありけめ、（常夏）

風はだ寒く、もののあはれなるに誘はれて、箏の琴をいとほのかに搔きならし給へるも、おくふかき声なるに、いとど心とまりはてて、なかなかに思ほゆれば、琵琶をとり寄せて、いとなつかしき音に、想夫恋を弾き給ふ（横笛）

想夫恋は、心とさし過ぎて言出で給はむや憎きことに侍りまし、物のついでにほのかなりしは、折からのよしづきて、をかしう侍りし（同）

とある、徒然草（二一四段）には「**想夫恋**といふ楽は、女、男をこふる故の名にあらず、本は相府蓮、文字のかよへるなり、晋の王儉、大臣として、家にはちすをうゑて楽を愛せし時の楽なり。」とある。甲子夜話に「去れば平氏繁昌の頃、彼れは宋の代なれども、吾が楽は随唐よりも伝へしまゝを用ひしなるべし。総じてこの楽は、いかなることをか為せし楽ならん。楽曲考に舞無とみえたれば、これ舞楽に據りて知る由もなからん。林祭酒の如き通達の人に問はんか。（広文庫）とある。

長恨歌伝は前進士陳鴻の撰で、白楽天の長恨歌の註解であって、同詩に冠せられたものである。その初めは「開元中泰階平、四海無レ事、明皇在レ位歳久、倦二於旰食宵衣一、政無二大小一、始委二於有丞相一、深居遊宴、以二声色一自娯、先レ是元献皇后武淑妃、皆有レ寵、相次即世、宮中雖二良家子千数一、無二可レ悦レ目者一、上心怨怨不レ楽、……詔二高力士一潛捜二外宮一、得二弘農楊忠琰女於壽邸一」である。平曲では高倉帝は前に葵の前を寵愛していられたが、葵の前が即世したので、中宮の御方より小督の局を進め奉った（流布本）この高倉天皇対葵の前、小督の局の関係は、長恨歌伝の玄宗皇帝対元献皇后、武淑妃、楊貴妃の関係さながらである。小督は始めは冷泉大納言隆房の愛人であったが、清盛から邪魔されて死を決する程苦しみ、次には高倉帝との愛も清盛に脅迫される。これは宇治十帖の浮舟に似た運命である。隆房には或高貴な女性との愛を綴った艶詞なる述作があり、その女性は小督であるらしいから、流布本平家の作者が艶詞によって小督の巻を書いたことは疑はれない。

源氏物語夕顔の巻に、夕顔の上が死去した後、侍女の右近が光源氏に、女主人の素姓を物語る処が、

頭中将未だ少将にものし給ひし時、**見そめ参らせ給ひて**、三年ばかりは志ある様に通ひ給ひしを、去年の秋の頃、かの**右の大臣殿よりいと恐しき事の聞え**まうできしに、物懼を理なくし給ひし御心に、せん方なう思しおぢて、西の京に御乳母の住み侍る所になむ這ひ隠れ給へりし。それもいと見苦しきに住み佗び給ひて、山里にうつろひなむと思したりしを、今年よりは塞りたる方に侍りければ、違ふとて、怪しき所に物し給ひしを、見顕はされ奉りぬ

ると思し歎くめりし

とあるのは小督の巻には、

この女房と申すは、……冷泉の大納言隆房の卿、**未だ少将なりし時、見染めたりし**女房なり。

とあって、

入道相国、この由を伝へ聞き給ひて、「中宮と申すも御女、冷泉の少将もまた婿なり。小督の殿に二人の婿を取られては、世の中よかるまじ。いかにもして小督の殿を召し出いて、失はむ」とぞのたまひける。……

と脅迫されたことと符合している。尚長恨歌伝が、平曲の二代后、禿童・葵の前・経盛入水に引かれてあることは別項に抄した如くである。

第三論　月光美　附　琵琶

月光の美　源氏物語には、月の事項は百五十五ある。その中から中秋の名月の場面を三つ抄出してみやう。

十五夜の月のまだ影隠したる夕暮に、仏の御前に宮おはして、端近うながめ給ひつつ念誦し給ふ。若き尼君たち二三人。花奉るとて鳴らす閼伽杯のおと、水のけはひなど聞ゆる、さま変りたる営みにそそきあへる、いとあはれなるに、例の渡り給ひて、光「虫のねいと繁り乱れたる夕かな」とて、我も忍びてうちずし給ふ。阿弥陀の大呪いと尊くほのぼの聞ゆ。（鈴蟲）

月のいと花やかにさし出でたるに、今宵は十五夜なりけりとおぼし出でて、殿上の御遊び恋しく、所々眺め給ふらむかしと思ひやり給ふにつけても、月の顔のみまもられ給ふ。「二千里外故人心」と誦し給へる、例の涙もとどめられず。入道の宮、「霧や隔つる」と宣はせし程、いはむかたなく恋しく、折々の事思ひ出で給ふに、よよと泣かれ給ふ。人々「夜更け侍りぬ」と聞ゆれど、なほ入り給はず、〳〵見る程ぞ　しばし慰む　めぐりあはむ　月の都は　はるかなれども（須磨）

月をかしきほどにきりわたれるをながめて、すだれをすこしみじかくまきあげて、人人ゐたり。すのこに、いとさむげに身ほそくなそばめるわらはひとり、おなぐさまなるおとななどゐたり。うちなる人、ひとりははしらにすこしゐかくれて、**琵琶**をまへにおきて、ばちをてまさぐりにしつつゐたるに、雲がくれたりつる月のにはかにいとあかくさし出でたれば、「扇ならで、これしても、月はまねきつべかりけり」とて、さしのぞきたるかほ、いみじくらうたげに匂ひやかなるべし。そひふしたる人は、ことのうへにかたぶきかかりて、「いる日を返すばちこそ有りけれ。さまことにも思ひおよび給ふ御心かな」とて、うちわらひたるけはひ、今すこしおもりかによしづきたり。「およばずとも、これも月にははなるるものかは」など、はかなきことを、うちとけのたまひかはしたる御けはひども、さらによそに思ひやりしにはにず、いと哀になつかしうをかし。（橋姫）

冬の月二例

十二月の月夜の、曇りなくさしいでたるを簾垂まきあげて見給へば、向ひの寺の鐘の声、枕を欹てて、今日も暮れぬとかすかなる

を聞きて、〳〵おくれじと空ゆく月を慕ふかな遂にすむべき此世ならねば（總角）

註　文集十六律詩「遺愛寺鐘欹枕聴、香爐峯雪撥宵看による。

拾遺集（哀傷）山寺の入相の鐘の声ごとに今日も暮れぬと聞くぞ悲しき。

雪のいたう降り積りたる上に、今も散りつつ、松と竹とのけじめをかしう見ゆる夕暮に、人の御かたちも光りまさりて見ゆ。光「時々につけても、人の心を移すめる花紅葉のさかりよりも、冬の夜の澄める月に、雪の光りあひたる空こそ、あやしう、色なきものの身にしみて、この世のほかの事まで思ひ流され、面白さもあはれさも残らぬ折なれ。（槿）

月遊の場面が多い。その一例、

月さし出でぬれば、大御酒など参り給ひて、昔の物語などし給ふ。霞める月の影心にくきに、雨の名残の風すこし吹きて、花の香なつかしきに、御殿のあたりいひ知らず匂ひ満ちて、人の御心地いとえんなり（梅枝）

私が特に注意するのは、槿の巻の冬月の描写である。詩は無限永遠なるなるものへの霊魂の思慕である。空想・連想の自由を有し、主観の夢を呼び起すものは詩である。詩は浪漫的宇宙的宗教精神である。地上の現実生活は散文的輪廻であるが、詩は生命を新たにし、精神を宗教的に保つことができる。最高の情緒も感傷もこの宗教性からきたものである。偉大な芸術家の多くは、もし芸術家にならなかったならば、皆聖者になり得た人たちであったであろう。（ジルソン教授）もしあの驚くべき才能、創作的想像力のあの強い力が私の中に存在していなかったらば、私は自分の精神の明確な認識と心の飛躍に従うことができたであろうか。そして私は聖者になったであろうか。（ワグナー）といっている。[1]

月の青白い寒色は、日中の現実生活の煩悩の為に疲労した心に、沈思・瞑想・無限想像の自由を恵み、孤独の悲哀を楽しませる。音楽に喩えれば横笛・琵琶・尺八である。月は宇宙に古より只一つしか存在しないから、空間時間を超えて一切衆生から讃仰される絶対唯一神である。仏教で月光菩薩・月愛三昧と称せられる所以である。月は人を詩人に還す。即ち煩悩なき無我無欲の宗教人に還す。芸術的観照とは対象を自我から隔てたる特殊な態度であって、すべての美的享受は、観照享受に属する。特殊な態度とは仏教のいう無我の般若、妙観察智である。対象に対する感動を鎮め深めた秩序統一ある美的感情である。月光にはこのやうな功徳がある。だから菩薩である。

源氏物語の成立は、十一世紀の初頭拾遺集成立までであって、拾遺集には秋の歌の第一位は月で、このことは中世の連歌までも続いている。源氏物語憧憬の現れである。[2] 光源氏が人と異って冬の月を殊更に好んだことは、巻々にみられるが、前抄「槿」巻の文はよき例証である。雪を照す月光の白色世界は、色即是空の般若の象徴である。宗教的崇高である。「槿」巻において光源氏は、三十二才で漸く仏教的に向上してきて抄出した雪月観照の状況は、懺悔の象徴でもある。光源氏をこの様な清浄美に導いた力は、天台摩訶止観であり且これから湧出した源信の「往生要集」であった。「往生要集」には最初に厭離穢土が説かれ次に欣求浄土が説かれているが、余りにも

幸福な王朝貴族達は、自己の罪を内観することも、社会を地獄と観照する智慧を発見しえなかった。然し源氏物語制作の環境としての藤氏貴族には凋落の秋風が吹きそめていた。これを直観した天才紫式部は、理想の人間像として描いている光源氏に、罪業深き藤壺の為に怨霊鎮魂・得脱成佛の供養を懇ろにさせ、

内にも、御心の鬼に思す所やあらむ、と思しつむ程に、阿弥陀ほとけを心にかけて、念じたてまつりたまふ、おなじ蓮とこそは、

なき人をしたふ心にまかせてもかげ見ぬみつの瀬にやまどはむ

と思すぞ憂かりけるとや（槿）

と内観懺悔させている。厭離穢土・欣求浄土の世界である。これを象徴すれば雪月の素白である。唐の真言僧一行は、「白とは即ちこれ菩提の心なり。この菩提の心に住するが故に、即ちこれ白住處といふ」（大日経疏第十一）古来この尊を祀って息災延命を祈誓し、これを白衣観音法・或は白処尊法と称し、「本法によりて念誦せば、一切の災難自然に消滅し、一切の不祥は、この真言を誦せば、よく吉祥となる」（七曜攘災決巻上）と説かれた。この法のわが国で最初に修行されたのは、源氏物語の成ったと考えられている一條天皇寛弘五年（一〇〇八）から後、藤原政権が衰弱し源平武士が実力を蓄えつつあった鳥羽院政の長承元年（一一三二）で、法然はその翌年に誕生している。源信や法然の念仏の基礎にある天台摩訶止観には、処々に白を礼讃し、「六牙の白象と言ふは、是れ菩薩の無漏無染の六神通なり。無漏無染なる之を称して白と為す」等とある。

和漢朗詠集（一〇一三）には、白と題して漢詩五、和歌一をあげた。その中で雪月は、

蘆州の月の色は潮に随って満つ、菰嶺の雲の雲の膚は雪と連なれり。

しらしらと　しららげたるとし　月光に雪かきわけて　梅の花を

る

がある。この歌の出典は未詳であるが、伝西行の撰集抄巻八（一一八三）には、

昔村上ノ帝（在位九四六―九六六）ノコロ、如月ノ中ノ十月ノハジメツカタ、雪イミジク降リカサネテ、月コトニアカクテ、（中略）木ゴトニ花サク心チシテ、何レヲ梅トワキガタキニ公任ノ中将ヲメシテ、梅ノ花折テマイレトテ遣ハサレケルニ、程ナク雪ヲモチラサズ、折テマイリ給ベクケルニ、帝イカガオモイツルト仰ノ有ケルニ、カクコソヨミテ侍ツレトテ、シラ〳〵トシラケタルヨノ月影ニ雪カキワケテ梅ノ花オル。

和歌の様式である遠白体の源泉はここにある。古今和歌集では春の歌一三四、秋一四五であるが、新古今では春一七四、秋二六六である。古今、後撰・拾遺での秋の景物の第一位は紅葉であるが、新古今では月が第一位である。紅葉は後拾遺で四位、金葉で二位、詞花で四位、千載で二位、新古今で五位である。紅葉と月の交代である。紅葉は後拾遺以下主として冬の景物として扱はれている。新古今では冬の第一位は雪で次が時雨である。時雨が降れば紅葉は益々色を濃くする。藤原貴族の興隆期の古今集の月の第九位が、王朝貴族美の残照を語る平曲時代の新古今においては第一位になっている。[3] ここでもののあはれは、空白の世界であると結論できる。そう

してその源泉に源氏物語の槿巻の雪月の描写がある。

源氏物語ではまめごとといった政治や家計生活も描かれてはいるが、それは月光が万物を優艶に照す如く朧化されている。そしてあだごと・はかなごとといった風流や女々しい恋愛や死や無常は五十四帖のどの巻々にも、細々と書きつづられてある。これら風流・恋愛は強いて朧化しなくても、非現実的である。これが多く描かれているということは、**源氏物語が月光的**・女性的・詩的・宗教的であることを意味しているのである。このやうな美を描かせたものは、作者の浄土教世界観であった。もののあはれを最も美妙に描いている時季は、秋の月夜である。私は紫式部は観経を信仰して源氏物語を書いたと主張してきたが、その観経に、十六想観の真身観に、

仏眼は四大海水の如く青白分明なり。身の諸の毛孔より光明を演出す。須彌山の如し。彼の佛の円光は百億の三千大千世界の如しとあることを象徴すれば**月光**である。月光は浄土を象徴する。

平曲は哀史・哀詩である。巻頭第一章「祇園精舎」の蔵める涅槃経四句偈の仏教が、全巻を貫流している。戦乱の為に鮮血を流し妻子と別れ、生命を捨てねばならぬ穢悪の世界を厭離し、一向に浄土を欣求する歴史的運命悲劇は、悲壮・崇高な詩である。その内容には、神仏の冥護を信仰して復讐する物語であるという崇高と、ほろび往くものも、弥陀の本願力は摂取し給うという哀愁と崇高が含まれている。悲劇の一門が法然浄土教で済度されている。源氏物語はこれに類似する処も尠くないが、最も異る処は、武力によらねば歴史を大改新できぬ時代を叙した戦記物語であることである。軍記であるから悲壮である。宗教的精神を以て男々しく一生を精進した人物はいない。受助的である。平家第一級の人物重盛において尚観相的美的浄土教に終った。清盛は藤道長に憧れていたやうであったのが、その身辺には源氏物語の気分がつきまとっていた。このやうな内容を哀音を主調とする声明風の平曲の琵琶の撥音は**月光の曲**である。ことばの韻律は霊魂を顕彰する。その故に平曲は源氏物語より更に宗教的抒情を加えた。

平曲の月光の美を最も巧妙に語っているのは、巻五の「月見の事」である。

旧き都は荒れゆけど、今の都は繁昌す。あさましかりへる夏も暮れて、秋にも既になりにけり。秋もやうやう半になりゆけば、福原の新都にましましける人々、名所の月を見むとて、或は(A)源氏の大将の昔の跡をしのびつゝ、須磨より明石の浦づたひ、淡路の迫門をおし渡り、絵島が磯の月を見る。（中略）旧都に残る人々は伏見・広沢の月を見る。中にも徳大寺の左大将実定の卿は、旧き都の月をこひつゝ、八月十日あまりに福原よりぞ上り給ふ。何事も皆変りはてゝ、稀に残る家は門前草深くして、庭上露しげし、蓬が杣、浅茅が原、鳥のふしどと荒れはてて、蟲の声々恨みつゝ、黄蘭、紫蘭の野べとぞなりにける。今ふるさとの名残とては、近衛河原の大宮ばかりぞましましける。(B)大将その御所へ参り、まづ随身を以て惣門を叩かせらるれば、内より女の声にて、「誰ぞや蓬の露、うち払ふ人もなき所に」と咎むれば、「これは福原より大将殿の御上り候」と申す「さ候はゞ惣門は錠のさゝれて候ふぞ、東の小門より入らせ給へ」と申しければ、昔をやおぼしめし出でさせ給ひけむ、南面の御格子あけさせ、**御琵琶**あそば

されける所へ、大将つと参られたれば、しばらく御琵琶をさし置かせ給ひて、「夢かやうつゝか、これへこれへ」とぞ仰せける。Ⓒ源氏の宇治の巻には、優婆塞の宮の御女、秋の名残を惜みつゝ、琵琶を調べて夜もすがら、心をすまし給ひしに、有明の月の出でけるを、なほ堪へずやおぼしけむ、撥にて招き給ひけむも、今こそおぼしめし知られけれ。待宵の小侍従と申す女房も、この御所にぞ候はれける。（中略）大将この女房を呼び出でて、昔今の物語ども し給ひて後、小夜もやうやう更けゆけば、**旧き都の荒れゆくを、今様にこそうたはれけれ。**

ふるき都を来て見れば　浅茅が原とぞ荒れにける
月の光はくまなくて　秋風のみぞ身にはしむ

と、おしかへしおしかへし、三返歌ひすまされたりければ、大宮を始め奉って、御所中の女房たち、みな袖をぞぬらされける。さる程に夜もやうやう明けゆけば、大将いとま申しつゝ、福原へぞ帰られける。

これは敗走者平家と共に福原にあった貴族が、京師の月を賞美する為に帰った場面である。

Ⓐは光源氏の流謫の須磨明石巻を想起している。光源氏もここで中秋京都の月を偲んだことは、先に抄出しておいた。

Ⓑは源氏物語の蓬生巻に、明石から帰洛した光源氏が、四月頃の艶なる夕月夜に、蓬生の露を分けて、惟光を伴に昔契った末摘花の荒宅を訪ねた次の情景が想起されている。

昔の御ありきおぼし出でられて、**えん**なる程の**夕月夜**に、道のほどよろづの事おぼし出でておはすに、かたもなく荒れたる家の、木立茂く森のやうなるを過ぎたもふ。おほきなる松に藤の咲きかかりて、月影になよびたる、風につきてさとにほふがなつかしく、そこはかとなきかをりなり、橘にはかかはりてをかしければ、さし出でたまへるに、柳もいたうしだりて、築地もさはらねば、乱れ伏したり。見し心地する木立かな、と思すは、はやうこの宮なりけり。（中略）惟光も、さらにえ分けさせたまふまじき、蓬の露けさになむはべる、露すこし払はせてなむ、入らせたまふべき云々

である。

Ⓒは光源氏の子薫中将は、世をはかなみ、これも世をはかなみ宇治に隠棲した仏に仕え、二人の姫と共に晩年を淋しく暮す叔父の八宮を時々訪ねていた。ある晩秋に八宮の山荘を訪ねると、八宮は山寺に参籠して留守である。その時見た姫君は、

月をかしきほどに霧りわたれるを眺めて、簾を短く巻き上げて人々居たり。簀子に、いと寒げに身細くなえばめる童一人、おなじさまなる大人などゐたり。内なる人、一人は柱に少しゐ隠れて、**琵琶**を前に置きて、撥を手まさぐりにしつゝゐたるに、雲隠れたりつる月の俄にいと明くさし出でたれば、「扇ならで、これしても月はまねきつべかりけり」とて、さしのぞきたる。（橋姫巻）

であった。平曲の作者はこれを連想しているのである。この様に一章中に三つも、源氏物語の月光の詞文を引いて、その悲哀を伝えている。而して平家物語の「月見」とその前の「新都」の「旧都は既にうかれぬ。新都は未だことゆかず。ありとしある人はみな身を浮雲の思をなし」「旧き都は荒れゆけど、今の都は繁昌す」は、隠遁

はしても、王朝的風雅に憧れた長明の「方丈記」から借っている。平曲には尚次の如き秋月が語られてある。（流布本）

㈠さる程に平家は福原の旧里にして、一夜をぞあかされける。折ふし秋の月は下の弦なり。深更空閑にして、旅寝の床の草枕、露も涙も争ひて、ただもののみぞ悲しき。（中略）、三年が程に荒れはて、旧苔道を塞ぎ、秋の草門を閉づ。瓦に松生ひ垣に蔦茂れり。臺傾いて苔むせり。松風のみや通ふらむ。簾たえ閨あらはなり。月影のみぞさし入りける。（福原落）

更けゆく秋のあはれさは、いづくもとはいひながら、旅の空こそ忍びがたけれ。九月十三夜は名を得たる月なれども、その夜は都を思ひいづる涙に、われから曇りてさやかならず。九重の雲の上、久方の月に思をのべし夕も、今のやうに覚えて、薩摩の守忠度、〳〵月を見し去年のこよひの友のみやみやこにわれを思ひ出づらむ。修理の大夫経盛、〳〵恋しとよこぞの今宵の夜もすがらちぎりし人のおもひ出られて。皇后宮の亮経正、〳〵わけてこし野べの露とも消えずして、おもはぬ里のつきを見るかな。（宇佐行幸）

播磨の国明石の浦にぞ著かれける。名を得たる浦なれば、更けゆくまゝに月澄み上り、秋の空にも劣らず。女房たちはさしつどひて、一年これを通りしには、かゝるべしそは思はざりしをとて、忍び音に泣きぞあはれける。師の佐殿、つくづくと月をながめ給ひて、いと思ひ残せる事もおはせざりければ、涙に床も浮くばかりにて、かうぞ思ひつづけらる。〳〵ながむればぬるゝ袂にやどりけり、月よ雲井のものがたりせよ。治部卿の局、〳〵雲の上に見しにかはらぬ月かげのすむにつけてもものぞ悲しき。大納言の佐の局。〳〵わが身こそあかしの浦にたびねせめおなじ波にもやどる月かな。

判官は猛き武夫なれども、さこそ各々昔恋しう、もの悲しうもおはすらむと、身にしみてあはれにぞ思はれける。（内侍所の都入）

月光の美に協調する琵琶は、源氏物語に三七例がある。平曲では流布本によれば、前抄「月見の事」以外に、①竹生島詣・②経正都落・③青山の沙汰・④千手の曲がある。

①②③はすべて経正に関する曲である。清盛の孫皇后宮の亮経正が、義仲追討の為北国遠征の途上、竹生島明神に詣うで戦勝祈願をした場面で、

経正琵琶を取って弾き給ふに、上玄・石上の秘曲には、宮の中も澄み渡り、まことにおもしろかりければ、明神も感応に堪へずやおぼしけむ、経正の袖の上に、「**白龍現じ**」と見え給へり。経正あまりの忝さに、しばらく御琵琶をさし置かせ給ひて、かへりぞ思ひつゞけらる。〳〵ちはやぶる神にいのりのかなへばやしる人も色のあらはれにけり。目の前にて朝の怨敵を平げ、兇徒を退けむ事疑なしと喜ん（竹生詣）

でいる。これは音楽感応刹生説話である。竹生島宝厳寺は、行基菩薩が勅を奉じて弁財天を祀ったことに始る。弁財天は辯天・美音天・妙音天とも称し、人に無凝弁才を具し、福智を益し、延壽を得しめ、天災地変を除き、戦勝を得しむる天女。もと河川を神格化した女神であるから、平曲に「**白龍現じ**」といったのである。龍は蛇形の鬼神で、雲雨を変化すると信じられている。辯天の妙音と辯才は河川の音に関係し、この神の持てる琵琶はこれを象徴するとせられ

る。

③は経正愛玩の琵琶の縁起であって、

かの青山と申す御琵琶は、昔仁明天皇の御宇嘉祥三年三月に、掃部の頭貞敏渡唐の時、太唐の**琵琶**の博士**廉承武**にあひ、三曲を伝えて、帰朝せしに、その時玄象・獅子丸・青山、三面の琵琶を相伝して渡りけるが、龍神や惜み給ひけむ、波風荒く立ちければ、獅子丸をば海底に沈めぬ。今二面の琵琶を渡いて、わが朝の帝の御宝とす。村上の聖代応和のころほひ、**三五夜中の新月の色**、白くさえ、涼風颯々たりし夜半に、帝清涼殿にして玄象をぞあそばされける。時に影の如くなる者御前に参じて、優にけだかき声を以て、唱歌をめでたう仕る。帝しばらく御**琵琶**をさしおかせ給ひて「そもそも汝はいかなるものぞ、いづくより来れるぞ」と仰せければ、答へ申していはく、「これは昔貞敏に三曲を伝へ候ひし、大唐の琵琶の博士廉承武と申すものにて候ふが、三曲の中に秘曲を一曲残せる罪によって、魔道に沈淪仕る。今君の御撥音妙に聞え侍る間、参入仕る所なり。願はくはこの曲を君に授け参らせて、佛果菩提を生ずべき」由申して、御前に立てられたりける青山を取り、転手をねぢて、この曲を君に授け奉る。三曲の中の上玄石上これなり。（中略）この経正最愛の童形なるに依って、下し賜はられたりけるとかや云々。

とあるのは、**琵琶霊異記**である。

④は重衡が鎌倉に引かれた一夕、頼朝のさし向けた遊女千手の前の琴に琵琶を取って合奏した場面で、頼朝は、「平家の人々はこの二三個年は、軍合戦のいとなみの外、また他事あるまじきとこそ思ひしに、さても三位の中将の琵琶の撥音、**朗詠**の口ずさみ、夜もすがら立ち聞きつるに、優にやさしき人にておはしけり」と評した。重衡も亦王朝の美に生きた武将であった。この曲は白楽天の琵琶行を消化している。重衡は後に南都に送られ斬殺される。千手は一夜の縁をはかなみ、尼となって後生の菩提を弔う。

源氏物語で琵琶を弾いたのは、男では螢兵部卿の宮、明石の入道・夕霧・匂宮・光源氏・女では明石の上・中務の君・源典侍・少将の命婦・大宮・紅梅大臣の中の君・螢兵部卿の宮の姫君・宇治の大い君・中の君・小野の少将の尼君である。これらは皆貴族であるが、当時既に賤民琵琶法師―琵琶を弾いて、身すぎする者法師がいたことは兼盛集に「びはのほうし、四つの緒に思ふ心をしらべつつひきありけどもしる人もなし」小右記の寛和元年七月十八日の条に「召二琵琶法師一、令尽二才芸一給二少禄一云云」と証している。

琵琶は元胡国の楽器で、日本には仁明天皇の頃遣唐准判官藤原貞敏が廉承武（平曲・青山の沙汰に見ゆ）より伝えて、貴族の遊宴には欠ぐべからざるものとなったが、又遊女がこれをもって旅客に侍し旅愁を慰めたことは、「本朝無題詩」（後白河院・一一六二成）の釈蓮禅の詩に、

聽二妓女之琵琶一有レ感

琵琶転レ軸四絃鳴　妖艶簾中薄暮程　清濁未分空側耳　弛張始理自多レ情　飛泉濺レ石逆流咽　好鳥遊レ花高韻軽　蕭瑟暗和風冷暁　松琴誰玩月秋晴　不レ思客路入二胡典一　無レ飢妓窓激越声　腸断何誰**湓浦畔**　夜舟弾處楽天行

が証する。最後の「夜舟弾處楽天行」は、楽天の**琵琶行**である。又

散木弁歌集(一一二九)には、

あしやといふ所にて、びは法師のびはをひきけるを、ほのかにききて、むかしをおもひいでらるゝ事のありて

流れくるほどの雫にびはのをゝひきあはせてもぬるゝ袖かな

とある。琵琶盲僧の始りは、宇多天皇の頃の蟬丸にありと、「今昔物語」・「江談抄」はいう。平家物語「海道下り」には、

賀茂川、白川うち渡り、松坂・四宮河原にもなりしかば、ここはむかし、延喜第四の皇子蟬丸の、関のふもとにすてられて、つねは心をすまし、びわを弾じたまいしに、博雅の三位といつし人、三年が間、夜をかかさず、歩みをはこび、立ちききて、秘曲を伝えたまいけん、わらやの床の旧跡も、思ひいれてぞ下られける。

とある。平曲の元祖は後鳥羽院の頃の盲僧生佛である。(徒然草)

源氏物語の美と平曲の美　は琵琶によって深く結びつながっている。これを積極的に連結したものに白楽天の**琵琶行**がある。その序文に曰く、

元和十年、予、九江都の司馬に左遷せらる。明年秋、客を**潯**浦口に送って、舟中にて夜琵琶を弾ずる者を聞く。其の音を聴くに、錚錚然として京都の擪有り。其の人を問へば、本長安の倡女にして、嘗て琵琶を穆・曹二善才に学びしが、年長け色衰へて、身を委ねて賈人の婦と為ると。遂に酒を命じて快く数曲を弾ぜしむ。曲罷んで憫然として、自ら少小の時の歓楽の事と、今の漂淪憔悴して、江湖の間に転徒することを敍ぶ。予出でて官してより二年恬然として自ら安んず。斯の人の言に感じて、是の夕べ始めて遷謫の意有るを覚ゆ。因りて長句の歌を為りて以て之に贈る。凡そ六百一十六言。命じて琵琶行と曰ふ。

源氏物語「明石巻」に、明石入道が、

聞し召さむには何の憚りか侍らむ。御前に召しても、商人の中にてだにこそ、ふるごと聞きはやす人は侍りけれ。琵琶なむまことの音を弾きしづむる人、いにしえも難う侍りしを、をさ〳〵とじこほることなり。なつかしき手など筋ことになむ、いかにたどるにかはべらむ、荒き波の声にまじるは、悲しくも思うたまへられながら、がきつむるもの嘆かしさ、紛るゝ折々もはべり。

とあって、「河海抄」は琵琶行序の一部を引き、更に我從二去年一辞二帝京一、謫居臥レ病潯陽城、潯陽地僻無二音楽一、終歳不レ聞絲竹声、今夜聞二君琵琶語一如レ聴二仙楽一耳暫明と詩の一節を引き、今此事を思ひいだす、尤有二幽致一乎と釈し、「花鳥余情」は、「文集の琵琶行は白楽天ながされて、江州の司馬になれる時の事也。明石の入道わが娘をいやしきあき人にたとへて申し侍り、上には箏のことをいひて、これより又明石の琵琶にも達したるよしを申し侍らんため、あき人の事をいひ出せり。上を結し下を結し下しおこす詞也。物語のつくりざまおもしろくかきなしたるべし」と評している。

明石入道が娘が琵琶の上手であることを自慢しているのである。平曲では巻三の「大臣流罪の事」に、

罪なくして配所の月を見むといふ事をば、心あるきはの人の願ふことなれば、大臣敢て事ともし給はず。かの唐の太子の賓客白楽天、潯陽の江の邊にやすらひむ、その古を思ひやり、鳴海潟汐路はるかに遠見して、常に朗月を望み、浦風に嘯き、琵琶を弾じ、和歌を詠じて、なほざりがてらに月日を送り給ひけり。

は、琵琶行を引いた。琵琶行に「潯陽江頭夜送客」とある。清盛の私怨により罪無くして尾張に流された太政大臣藤原師長の境遇は、白楽天や光源氏や宇治の八宮に似ている。

巻十「熊野参詣」

（小松大臣殿の嫡子三位の中将）未だ四位の少将と聞え給ひし安元の春の比、法住寺殿にて五十の御賀のありしに、父小松殿は内大臣の左大将にてましまし、伯父宗盛卿は中納言右大将にて、階下に著座せられたり。其外三位中将知盛、頭中将重衡以下、一門の人々今日を晴と時めき給ひて、垣代に立給ひし中より、此三位中将殿梅の花をかざして、青海波を舞ひでられしかば、露に媚たる花の御姿、風に飜る舞の袖、地を照し天も耀くばかり也。

は、源氏物語の「紅葉賀」の、

垣代など、殿上人地下も、心異なりと世の人に思はれたる有職の限整へさせ給へり。宰相二人、左衛門督、右衛門督、左右の楽の事を行ふ。舞の師どもなど、世に並べてならぬを採りつゝ、冬籠り居てなん習ひける。木高き紅葉の蔭に、四十人の垣代、言ひ知らず吹き立てたる物の音どもに合ひたる松風、真の深山颪も聞えて、吹き迷ひ、色々に散り交ふ木の葉の中より青海波の輝き出でたる様、いと恐ろしまで見ゆ。

が連想できる。盛衰記第四十七「六代御前」の、

遍照寺の奥小倉山麓、菖蒲谷の北に大覚寺と申所侍り、彼にこそ此二三箇年、権亮三位中将の北方とて、若公姫君二人相共に忍て住給へと云。北條不レ斜悦て止二関東下向一、則此女に人を附て伺見。大覚寺北に奥深僧坊あり。女房あまた忍たる体にて住居たる所あり、垣の障より見れば、犬子の縁に走出たりけるをとらんとて、少き人のいと厳しきが続て出たりけるを、又女房出て、穴浅増、人もこそ見侍れとて急呼入ければ、是ならん六代はとて立帰り云々

は、源氏物語「若葉」巻で、紫の上が祖母の尼君に養育されて住んでいた北山の僧都の坊を、光源氏が覗く話に據っている。「**灌頂巻**」は、源氏物語の「宇治」の巻から示唆と刺戟を受けて企て作られたのであろうか類似点が多い。

補　印度では、仏を礼拝する時、皷を打ち鳴らし、貝を吹き、ビワを弾くならわしであった。これらの楽器は、インドや西域で古くから愛好されていたようである。西域といへば、中国の西方、広くは中央アジア、小アジアを指すから、皷やビワの普及度は、寔に広かったことが肯ける。特にビワは、聖者が好んで弾く楽器であった。ビワの弦は普通四本であるが、二本・五本・六本・七本・八本などのものも作られた。ビワの名称は、その演奏の仕方からでたものであるという。手を押す動作を「琵」といい、手を引く動作を「琶」という。二つをつなぐと「琵琶」となる。ビワには「枇杷」の当字があり、また胡琴・国復・三五などの呼称もある。時代と共に種々に分れ、大ビワ・小ビワ・直頭ビワ・蛇皮ビワ・崑崙ビワ等あるが、著しい相違はない。吾が国にビワの伝えられたのは、遠く奈良朝であって、今日正倉院所蔵のビワを見ることができる。ビワは後に雅楽の主要楽器とされた。鎌倉時代には、新に平家ビワが現れ。続いて薩摩ビワ、筑前ビワ等もでて、専ら伴奏に用いられた。

注

① 西脇順三郎　詩学　八二頁

② 唐木順三　日本人の心の歴史　一七二頁

③ 同　一七〇―一七一頁